新刊紹介

佐藤俊樹　著
『社会科学と因果分析：ウェーバーの方法論から知の現在へ』
（岩波書店，2019年）

西村　幸満*

本書は，社会科学の成り立ちと因果分析のための考え方について，その創設者の一人であるウェーバーを結束点として位置づけなおし，社会科学の100年を再構成した専門書である。著者は，「ウェーバーの『適合的因果』を，統計的因果推論と分析哲学の反事実的条件文をモデルに再構成してみた」（vii）という。これまでのウェーバー研究は，かれの事例研究にフォーカスが置かれ，またその理論の研究が行われてきた。本書を紹介する筆者も，質的研究者のモデルとしてウェーバーを扱ってきたし，統計や因果推論については，戦後の統計学者の最新の説を押さえてきた。ウェーバーが統計学（とその分析哲学）を自説に組み込んでいた（それが現代的な水準にある）というのは，衝撃の事実であるが，この事実は，統計学では知られたことであり，日本においてさえも，一部の研究者には知られたことであったという。著者はこうした歴史に埋もれた研究者にも新たにスポットを当てるわけだが（「コラム①　ウェーバーの方法論の研究史」参照），これはこの本の副産物である。

本書は，20回の講義形式で学生に説明するように構成され，これらは「第1章　社会科学とは何か」，「第2章　百年の螺旋」，「第3章　適合的因果の方法」，「第4章　歴史と比較」，そして「第5章　社会の観察と因果分析」という5つの章にまとめられる。2章以外には長めのコラムがついている。

著者は，ウェーバーが1903年から1921年の間に書いた10本の論文のうち，1906年に書いた「文化科学の論理学の領域での批判的研究」[1]（4本目）が，ウェーバーの代表作として位置づけられず，1904年に書いた「社会科学的及び社会政策的認識の『客観性』」[2]（2本目）だけ，が代表作となったことから100年続くウェーバー理論のねじれが生じたとする（pp.5-7）。前者は「計量分析に近い人としてウェーバーが語られるとき参照され」（p.6），後者は「事例研究や文化科学に近い人としてウェーバーが語られるとき，参照される主な論考」（p.6）として位置づけられるという。

著者はこのねじれが現代までさまざまな問題を引き起こしてきたことを，原著や参照文献にあたり，当時の用語を現代的な用語に変換しつつ，丁寧に跡づけるのである（この手続きから，日本の多くのウェーバー研究者が統計学を理解できなかったことが推測される）。そして社会科学における因果分析は，質的にも量的にもウェーバーによってほぼ完成されていた事実を明らかにする。このことは第1章に要約して書いてあるが，書籍全体を通して，多様なねじれを引き起こしてきた問題の原因がここにあったのか，とその都度思い至るのである。

この論証を納得のいくレベルに到達するために著者は，100年にわたる期間の原著にあたり，さらに原著の参照文献にあたり，用語定義の調整を繰

* 国立社会保障・人口問題研究所　室長

[1] この論文は，森岡弘通訳（1965）『エドワルト・マイヤー　マックス・ウェーバー　歴史は科学か』みすず書房の後半に所収。

[2] この論文は，富永祐治・立野保男訳折原浩補訳（1998）『社会学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫，として単行本化されている。

り返すというシンプルな手続きを堅持している。明らかになった事実やそのねじれを認めない先人にとっては論争含みではあるが，その研究姿勢はまぎれもなく社会科学研究者のモデルとなるし，本書は研究者の実践のための指針となるだろう。その手続きは，同じウェーバーを質的に扱う著者の初の単行本，『近代・組織・資本主義：日本と西欧における近代の地平』[3]から一貫しているが，本書は多少読者フレンドリーになっているので，読み比べてもいいだろう。

第5章の後半，第18回の「事例研究への意義」，第19回の「ウェーバーの方法論の位置」，第20回の「社会科学の現在　閉じることと開くこと」，は17回までの論証を踏まえての論考になっているように思う。専門書の楽しみ方は，著者が到達した研究の頂からそのすそ野までも見下ろすことにもある。この本をぜひ手に取って楽しんでいただきたい理由である。特に，社会科学を志す若い研究者の方々には，研究生活の初期にこの本に出会えた幸運を甘受してこの本の到達点から研究を進めて欲しいと思う。ウェーバーの新しい位置づけから始まる社会科学の未来は，これまでの100年とは違った頂きに至るはずで想像するだけで心躍る思いがする。

（にしむら・ゆきみつ）

[3] 佐藤俊樹（1993）『近代・組織・資本主義：日本と西欧における近代の地平』ミネルヴァ書房。